

---

# 悪魔か天使

桃太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔か天使

### 【Nコード】

N6730T

### 【作者名】

桃太郎

### 【あらすじ】

神に、サタンへの復讐の為の生け贄に選ばれた私。自由を取り戻すための、孤独な戦いが始まった？

## 一話第一部

これは奪われた私の自由と日常を、やつらから奪い返すため、孤軍奮闘した私の戦いの物語である。

明日の天気を確認していると、突然ヒゲ親父のアップに切り替わった。

いきなりの怪奇現象をテレビを切り替える事で排除しようとしたが  
変わらない……………。

「御主きりもと・せつかが桐本雪華か」

電源を押すと、切ることは出来たので満足していると又ついた……。

「切るか普通！え！？とか。な、何これ！？どんな仕掛けよ！？とか。だ、誰！？とか、色々あるだろ！！そういった可愛い反応を」

「ふー」なんか知らんけど、しょうがない。

立ち上がり、コンセントを抜いてみた。

又つきやがった！！

「だから切るなっつーの！！何で冷静なの！？話しやすくもいいかもしれないが、混乱に乗じて……？ちよっ！ちよっと！？待て待て、待って下さい！壁に向けないで、布を被せないで！自分実は神です！

話をきいてー!!」

コンセントを抜いても消えないということは、諦めるしかないわけ  
で…。

諦めると言う言葉が腹立たしいが、さすがに自分のテレビを壊すの  
は嫌なわけで…。

変な生き物に耐性のある自分に嫌気がさしながらも、そんな事は感  
じさせない。

堂々とした態度で相手をうながした。

「あ、あの〜。テレビの向きとか、掛かってる布とか、お話しする  
のに邪魔になると思うのですが……。どけてもらえないでしょうか  
?」

「私は気にしないけど、直したいのなら全知全能の力で勝手に」

「そ、そんな…。全知全能の力でテレビで…。そんな孫の手みたい  
な扱いを…。」

珍しく私が譲歩してあげたのに、なぜか嘆かれた。

(こいつ、心底めんどくさいわね。)

思うと同時に立ち上がりかけると、慌ててこちらに向き直ってきた。

……こちらが見えてる?なら、向きなんか関係ないじゃん。とも思  
うが、脱線しそうだったので黙って話をうながした。

「実は、貴女はこのままでは地獄逝きが決定してしまうのです!!」

「?。別にいいけど。」

「ですが、大丈夫です!今回の事を天界では大変重く見ております!そこで、あなたの地獄逝きを阻止するための人材を派遣することにしました!!」

悲壮な声から一転、妙なテンションで喚きだし、こちらに身を乗り出すように身振り手振りではなしてくる。

正直、かなりのウザさだった。

「いらぬ。地獄逝きは気にしてないから、来なくていいわ。」

こういう相手には、冷静に、ゆっくり言い聞かすのが肝心だ。

「その人物はすで……え?い、いいの?気にしないの?」

キョロキョロと目を動かして、ああ……、とか。

そ、そんな……、とか。かなり拳動不審だ。私の言葉がよっぽど予想外だったらしい。

「だ、だってじごくですよ!?!怖いんですよ!チクチクですよ!?!」  
チクチクって何だよ。どうでもいいけど、ヒゲ親父がウルウルしながら画面いっぱい映ってるのがとても嫌。

私が顔をしかめたのが、自分のセリフの効果だと勘違いしたのか、

とたんに餌を前にしたような（注意：優しそうな）顔になった。

「デモでも大丈夫です！あなたが地獄に逝かなくてもいいようにきようせ…。もとい！修正してくれる優秀な天使を派遣しますので！」

「神様……本当によろしいのでしょうか。今回のこと、冥界に内密にするには彼女のエネルギーは強すぎます。それに、彼女が天界に来たときの歪みは」

画面の外から囁くように、けれど、確実にこちらにも聞こえるように言われた言葉が聞こえたとたん、真つ赤に興奮していた顔を、爽やかな笑顔に切り替え、頭をたれて”少しお待ちいただけますか？”とこちらの了承もとらず、三途の川をバツクに蛍の光が流れる画面に切り替わった。

「うるさい！その事はわしが何とかする！だいたい、サタンの奴にどれほど煮え湯を飲まされたか！サツチャンだってそうだろ！？俺が間を取り持ってる。とか言つといて、サタンめがとつたんだ！」

（……駄々漏れなんですけど）

もともと話しに興味がないので、雪華はコーヒーを作り台所に足を運ぶ。

（はあ、なんか面白いことないかしら…）

テレビ画面にいきなり神が現れるという奇怪な出来事がおこっているにもかかわらず、雪華の心にはさざ波すら起こらない。

コーヒーを飲み終え、小さな欠伸をこらえながら寝室に向かう途中、テレビにチラリと視線をやって、釘付けになった。

先ほどまでは穏やかな情景が流れていた三途の川に、小さな乱闘が始まっていた。

船頭に乗船を拒否されたものが、無理矢理乗ろうとして叩き落とされ、何度もチャレンジしているうちに、他の乗船拒否された者達も奮起。

暴徒と化した彼等は、船頭を集団で叩き落とした舟を乗っ取り、勝利の雄叫びを上げながら自分達で漕ぎ出す者、返り討ちにあい、川の中に沈んでいくものがでる大乱闘を繰り広げていた。

「三途の川を自分で渡ったり、川に沈むとどうなるのかしら？」

普通のテレビと違い、生々しいまでの現象を感じさせる乱闘をみても、眉をひそめるどころか楽しげに見惚れる姿は、なるほど、地獄へ逝くのもうなずける。

興味深く見守っていると、天界もやっとなつたようで、「三途の川が!」「帰るべき人間が渡っているぞ!」「霧を止める!吸つちまうぞ!」「どうなってるんだ!?!」「警備はどうした!?!」「神への抗議の署名をこちらに持って来ているようです!」「すぐに向かわせる!」「このままでは死神から苦情が来ますぞ!」「何てことだ!洗淨の川へ落ちてるのは、生き返りの奴です!」「早く救い出せ!」「消えた記憶はどうします?!」「知るか畜生!……おい!神は!神はどこいきやがった!……!」

疑問も解決したし、いきなりきれたので、話しも終わりと油断していた。

魔の手はすでに、我が家に迫っているとも知らずに…。

次の日、部屋で休んでいるとゴング（チャイム）が鳴った。

「はい、どなた？」 ドアを開けるとそこに、天使のコスプレをした変態が立っていた。 ” さいなら！！ ”

急いでドアを閉めたのだが、変態はしつこかった。

「いやいやいや、小声で言えば何を言っても許されると思うなよ！  
！つーか、神から俺のこと聞いてるだろが！おいこら！開けやがれ  
！」

ガチャガチャガチャガチャ、ヒジョーにしつこい。

「えい。」 電流撃退システム作動。

「ぎゃあああああ！」

「ふっ、一件落着」

しかし、ホーム・アローンに憧れて作った物が、本当に役に立つ時  
が来るとは……………。

「世も末ね」

ソファアに腰かけ、ポツリと呟くと、目の前の空間がゆがみ、そこから撃退したはずの変態が部屋に入ってきたので、

「世も末とか、お前が言うな!!」

机のポケットに入っているコックローチで撃退。

「靴はいて入ってくんな!!」

「ぎゃああああっ!!」 × 「

顔面を押さえてのたうち回っているが、五秒で”シトメル”という効果は発揮されていない。

「うーん。……不良品かな？」

「不良品かな?じゃねーだろーが!!」

さっそくクレームをと、携帯片手に殺虫剤を睨んでいると、ヒョイと抜き取られ逆噴射。

今度はこちらがのたうち回ることになった。

「ギヤア!?てっ、何すんのよ!!これはね、人様に向けてするよ  
うな物じゃないのよ!!」

「お前が先に俺に向けて使ってきたんだろーが!!」

「はあー！？あんなに言ってるの？私は人様にとって言ったじゃろ？ハン！！まさか自分が人間の定義に入っているとでも！？背中に羽と、頭に触角持つてんのは、虫って決まってんのだよ！恥を知らないさいー！！」

はん！私の言葉にぐうの音もないようね。

絶句するその姿は私の哀れみを誘い、この私が！譲歩してやろうとしたというのに。

「はあく？！触角？触角つったの！？背中の羽は良しとしよう、羽だし。でも、頭のコレはリングだろ！？触角違うし！スゲーキレーだろ！？なんで触角にみえんだよ！！アホかテメーは！」

背中を怒りに膨らませ、頭のリング？を指差してわめいている相手を、上から下までジックリと眺めて、気持ち、頭を下げ。悔やむように呟いた。

「そうよね、確かにあんまりだね。私、あんまり虫って得意じゃないけど、喚きちらすウザイ奴よりましよね…謝る…」

「うがー！！ふざけんな！俺はな！て・ん・し・だ！虫っころや、テメーら人間よりはるかに貴重で、希少で、奇跡のような存在なんだよ！分かったか！！」

噛みつくように放たれた言葉は、雪華を撃ち抜いた。

（貴重！希少！ああ！どうして気が付かなかったのかしら！？）

「ごめんなさい！私ったら、何てひどいことを…。混乱してしまっ

ていたの……許してはもらえないかしら？」

意志の強そうな切れ長の赤瞳を潤ませながら見上げ、祈るように組まれた両手は胸を強調するように押し上げる。

見上げたときに揺れた白銀の髪が、甘い香りと煌めきを放ち。短く整えられた髪からは、形の良い耳がよくみえる。

ホンの些細なその行動が、天使の怒りで赤く染まった顔をさらに赤くした。

（お、おのれ！面妖な技を使いやがって。）

「混乱？靴がどーの言ってたお前が？」

削がれた氣勢を取り戻そうと、ことさら意地悪な口調になった。

## 一話第二部

(私が神妙にしてるのに疑うなんて！なんていやな奴なの！！)

コックローチを口に突っ込んで噴出してやりたがったが、耐えた。

「非現実なことばかりだったでしょう？そういう時は、普通の事が気になるものなのよ」

「ふーん…。まあいいや、俺は天使なんだから、ちゃんと敬えよ。さっきから叫びっぱなしだったからな、咽がいてーや。なんか出せ。」

優越感にゆがんだ顔でドツカと、私の、この私専用のソファーに座りやがった！！我慢、我慢よ雪華！！怒りの形相を、必死で押し隠して笑った。

「……今コーヒーのスイッチ入れたから、ちょっと待ってね？…待つ間に、これで遊ぶ？カメラって、言うんだけど。知ってるかな？」

「カメラ？もちろん知ってる」  
興味なさそうに装っているが、目がチラチラ動き、カメラを意識しているのがまる分かりだ。

「買ったばかりだから、試し撮りしたいのよ。自分を写すのも寂しいものがあるし、あなたで試し撮りしていいかな？」

反応は劇的だった。

「マ、マジで！？まあ、ええけど。」

普通にしているつもりなんだろうけど、緊張のためか、背中の羽がひろがり、細かく震えるたびに、羽が抜け落ち、床をよごしていく。。。

(が、我慢よ。これがうまくいけば、全てにけりが、ケリがつく！)

ペット売ります。

先ほどの写真をのせて、準備よし

機嫌を直してコーヒーをいれ、私の財布を潤してくれる奴めの、最後の奉仕を施してやろう。

……ところが！！

「なあ、なんで俺の写真がオークションで売りにだされてんの？」  
ときた。

「チツ、なんで人外生物が文字読めるわけ？オークションを知ってるわけ？はー、私丸め込むの苦手なんよねー。たいぎいわー。(え？ほんまよう！？これじゃあ厄介払いとお金、両方手に入れようとしているみたいじゃん！？こんな気分悪いの見ることはないよ！！)」

「本心駄々漏れだし！つか、心の中の建前もヒデーし。喧嘩売つとんのか！！」

「ウツサイ！人の心読むなんて、なんてクズなの！！」

「それお前が言うか！？とんだけ自分のこと棚上げなんだよ！つか、神の許しのあるお前と違って、天使たる俺様が一般人に見えるわけねーだろ？ネットの世界から見たら、テメーは自分のソファアを撮って、自分のペットです て言い張っている頭の悪い女だぞ。」

ま、これで。俺のカッコイイ姿が見える、それがいかに幸運か分かったら？」

天使の言葉を聞いたとたん、顔から表情が抜け落ち、持ってきたコーヒーをぶちまけ、それでも収まらない苛立ちに、カップまで投げつけてしまった。

「ギャー！！あじあじあじいいいいギャフ！？」

(チツもつたいない事を！！)

躍り狂っていた天使は静かになったが、割れた物は直らないのに。

「お前が来てから最悪なことばかりじゃん！人のソファーも汚しやがって！！帰れ！チリに帰れ！！」

「はあ！？コレはお前だろ！！お前がぶちまけたんだろーが！！最悪なのはこっちじゃボケ！！テメーなんざ地獄逝きになってる！神様！神様！！まだ天界につながってるんでしょ！？聞いてましたよね！帰りますからね！？あいつは地獄がお望みだそうですよ！！」  
テレビに向かってひたすら喚いていたと思ったら、こちらに向かってニヤリ。

「じゃあな！！せいぜい苦しみながら逝け！！」

## 続き

「じゃあな!!せいぜい苦しみながら逝け!!」

彼にとっては決め台詞だったのだろう。

光につつまれ、消えかけていた彼に雷光が走らなければ……。

「えつつつつ!?!」

音もなく、天井に穴をあける事もなく、目も眩むような光が溢れ、思わずめをとじた。

「な、なに?？」

視界が晴れた先には、白目を剥いて倒れた天使と、天の川を連想させる輝くような黒髪を一つにまとめ、片側から流し、可愛い顔だちを鋭い瞳が引き締めて魅せている美人がいた。

「はじめまして桐本雪華さん、私はサミュエルと申します。今回は神とこの天使が多大なご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ございません。」

義務的に頭を下げると、謝罪は終わりとばかりに話を変えてきた。

「ところで、わたくし達の誠意は受け取っていただけましたか？」

「誠意?この事?いらないし、もうお帰りだそうよ。」

天使を一瞥すると、話を打ち切るようにテレビに背を向けた時、天界の罨が私の思考を絡めとった。

「人間界ではお世話になる相手に相応の金銭を渡して誠意をみせると習ったのですがいたらなくて申し訳ないこの者も”お金と”一緒にひきあげます。失礼しました。」

息継ぎすること無く一息に言い切ると、白目の天使が光に包まれた。

「待ちなさい!!」

逃がさぬよう、天使の羽を掴むと、ニツコリと微笑んだ。

「人間界は傷ついた者を放り出すほど腐ってないわ。彼が目を覚ますまでお暇でしょう?お話でも」

「ぐうっ!、い、いったいなんだった」

天使が意識を緩やかに回復させているのを見て、初対面であったはずの二人は、手段は違えどまったく同じ行動に移った。

雪華からはコックローチを、サミュエルからは天罰が落とされる。

「があああっつっ!!」

(弱らせてからだと効き目あり。)

再び静寂?が戻ると、顔に笑みを浮かべながら口を開いた。

「人間界は傷ついた者を放り出すほど腐ってないわ。彼が目を覚ま

すまで、あなたとゆっくりお話をしたいとおもっただけねど、どうかしら？」

「争いは何も海ませんが、話し合いは友情と愛情を生み出す有意義なもの。私も、貴女有意義な時間を持ちたいと願っております。」

自分で止めをさしておいて、シャアシャアと言っただけの雪華達。

こうして、てんしの未来を左右する悪女二人の友情と愛情を深める？お話が行われた。

「ふう。契約をかわす事に成功しましたと、一応、神に報告しておいて。」

先ほどまでみせていた笑顔を欠片もみせることなく部下に告げると、自分の部屋に帰るために立ち上がった。

「あ、あの。神様はサミュエル様に来るようにと・・・」

世迷いごとを、一睨みで黙らせ。

「つかれたと……神の望みを叶えるために頑張ったのだと伝えておきなさい。」

どうせ会いに行ったところで女々しい戯れ言と、愚かな口説き文句を聞かされるだけなのに、なぜ行かなければならないのか本気で疑問だった。

神も昔はまともだったものを……そう、あの日までは……。

ふと、あの運命のような日を思い出したが、想いをはせたりはしない。

彼女にとってかえられぬ過去よりも、未来のほうがよほど面白いからだ。

(ああ、彼は私に気付いたかしら？彼は彼女に対してどう出るのかしら？)

自分の欲望に素直すぎるくらい素直な彼女を思いだし楽しくなってくる。

素直な彼女は誘導しやすいのだが、導き手が増えたなら逆に読めなくなってくるだろう。

(ああ！彼女達に幸多からん事を！！)

今だけは彼女達のために祈ろう。

私は天使、弱き者達の”守護者”なのだから。

## 四

カーテンを透過した優しい日差しが、天使を厳しい現実へと揺り起こした。

「ああ？ここは……人間界？あれ？何でまだ人間界に？俺いつ寝たんだ？」

閉じようとする瞼を何度も押し上げ、焼けつくような焦燥感に促され、鈍い能を必死に回転させて記憶を掘り起こしていると。脇腹に鋭い衝撃がはしり、頭を覆っていた靄が一気に晴れた。

「思い出した！チキシヨウ、誰だ俺の邪魔しやがった……や……な、なんで？なんで帰れない？ど、どうして。」

わざわざおこしに来てあげたというのに、お礼も言わずに『帰るかえる』『開け、開けよ！』『天よ、俺はここにいる、ここにいるぞー！』『プギヤー！』と、なにやら奇つ怪な踊りと共に叫んでいる天使を見ていると、

「昨日あんな決断をした自分を殴り……たくはならないな。うん。私の間違うわけではない。ならこの天使のせいだから、天使を殴ればいいわね。うん、そうしよう。」

「もう殴ってんじゃねーか！おま、何しに来たんだ！」

「さっきファックスから貴方宛に手紙が届いたわ。確認なさい。」  
そうだったそうだったと頷きながら、一枚の紙を差し出してきた。

「あ？なんだこれ？……派遣天使に選ばれ死、スメール・ダイチへ」

あなたの派遣が正式に決定いたしました。就きましては、人間界への移籍を正式に認め、大地・スメール（だいち・スメール）としての戸籍と、暮らしていく為のお金を渡しておきました。桐本雪華が地獄に堕ちないと決まった時点であなたの任務を終了とする。では、あなたの犠牲に目を瞑りつつ………サミュエル。

しばらく手紙を睨み付けていたかと思うと、かわいた笑いを漏らしながらフラフラとテレビに向かう。と、駄々をこねるように、地団駄踏みながら喚きだした。

「サミュエルさん！なんで選ばれ氏が、選ばれ死になつてんですか！つーか俺の犠牲に目を瞑つてんじゃねーよ！！これは冗談ですよね？人間界に住むなんて、俺が可哀想じゃないんですか！？」

「ああ、名前の事は私もかわいそうだと思って。変えるように言つていたわ。これがその名前よ、感謝なさい。」

「誰が名前の事………」

受け取った紙には、ひろしま・けん 広島犬と書いてあった。

「名前はいいんだよ！！てか俺の本名だから！つか、広島犬で、犬みてーじゃねーか！！」

「え？私の犬でしょ？」

「うきー！！俺は帰る！俺はこんな名前も、場所も拒否しますよ！

「サミュエルさん、聞いてるんでしょ！？聞いてますよね！天界の糸がまだ繋がってるもん！聞いてるんだ絶対！！」

「うわー、ほんとにうきーて言う奴はじめてみた。」

雪華がドン引きしていると、こちらの声を聞いている。と言うようにファックスが再び動き出した。

「な、なんだよ・・・。」

ファックスに糸！？はっ！この俺と直接言葉を交わす事を恐れたか！」

勝ち誇ったように啖呵をきって、

「任務放棄は即追放！？堕ちてもらうだと！上等じゃないか、こんな世界に留まるより堕ちたほ・・・え？追放先人間界・・・あれ？サ、サミュエル様。これでは今と変わらな・・・いやむしろ、天使としての力を半分どころか全て失うわけで、より危険なことに・・・。」

ずっと見ていても面白いのだろうか、遅刻するのでそういうわけにもいかない。

「気がすんだ？朝御飯にしたいんだけど？」

死んだように濁った目でこちら見ると、フラフラとやって来て座ろうとしたので、仕方なく引き抜いた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6730t/>

---

悪魔か天使

2011年12月9日21時58分発行